



同志社人物誌 (51)

## 孤独な自由人

一元・総長湯浅八郎のこと

武 邦 保

弟姉妹)の間で過す。言うまでもなく、八郎に大きな影響を与えたのは母であった。初子のことを語ったときの八郎は勇敢であった。身内を語るには、あまりにも第三者的で、誇張したい気分であった。

彼女は、「熊本バンド」の奉教者、徳富猪一郎(蘇峰)の姉、それゆえ文人、蘆花は八郎にとってより若い叔父。初子は当初、女医を志し、向学心に燃え、熊本洋学校で学ぶ猪一郎や海老名弾正を窓越しに眺めつつ、授業を聴講していたという人。もちろん、そのときの彼女にはいとこの横井みや子(小楠の娘、後の海老名夫人)が一緒ついて、相共(こぶ)がなばったのである。

湯浅家に嫁してからは、合理主義と清教徒信仰の治郎に最も良く協調し、それゆえ伝統的な日本の風習に、もはやなじまぬものがこの家庭には先取りされていた。父の弟、吉郎は新体詩の先駆で八郎に文化への憧れを教え

### 二

湯浅治郎が信仰の師、新島襄の最後の願いを受けて東京を離れ、京都、烏丸通り蛤御門前に居を移したのは師没後、一八九一年(明

一  
湯浅八郎は一八八〇年(明治二十三年)四月二十九日に、父・治郎、母・初子の二子として(治郎にとっては先妻、茂登子の六子から数えて八番目の子として)、東京、赤坂に生れた。すなわち、治郎がその年七月一日に行われる大日本帝国憲法下の第一回帝国議会の民選議員(衆議院議員)の選挙に出馬し、それまでの群馬県議會議員から国政に参加しようとする華々しい時であった。

治郎は、やがて国会内では財政関係予算委員会、指導的役割を果たすが、それも、安中における彼の生業(治郎の父、治郎吉からの味

噲醬油の醸造販売業、「有田屋」の経験がある。一八八四年(明治七年)十一月二十九日より約一ヶ月間、丁度アメリカの十年間の生活

を切り上げて帰国、安中に帰郷していた新島襄から彼地の精神(ビュリタニズム)と社会生活を感動をもって聴かされた治郎は、四年後、安中教会設立を期す新島襄による受洗者三十名の筆頭となり、しばらく牧師代務も果たす。ともあれその合理主義と開放主義の発想(経済倫理、四海兄弟主義)は明治新政府に貢献するものとみられた。

いずれにしても、このような父をいただく八郎は幼少年期を大家族(父母、十四人の兄

治二十四年)春であった。治郎はこの時から新島の遺言の一つ、政法学校設立に向け、二代同志社社長小崎弘道や宮川経輝、中村栄助らと共に自らの政治家経歴と財政通であることを神の賜物として同志社に捧げ始めた。翌年まで代議士であったが、常務理事の仕事はついに奉仕で通した。八郎が府立師範学校付属小学校に入学する前、現、鳴沂高校あたりであったという寺町通りの府立幼稚園児であった時、広い御所を横切って行く代りに湯浅家出入りの人力車夫の誘いで通園していたことがあった。母・初子にそのことを正直に答えなかつた八郎は体罰を受け、小さい体を縁側から蹴落され、薪丸太で痛打された。

この母にして十八歳の息子を未だ目標も定かでないまま当時のアメリカまで送りえたのであろう。

一 神の前に正しく強く生きよ、との湯浅家の教育であったであらう。八郎は一九〇二年(明治三十五年)小学校を卒業し、全く自然に中学は同志社普通学校を選んだ。

それでも彼は大きな経歴をなした。三年生のとき、算術で落第、一年卒業延期、この失敗も湯浅家の中では彼自身の人生哲学をつく

るチャンスとされ、一九〇七年(明治四十年)三月十七日、原田助より同志社教会で洗礼を受ける決心をした。六年間の同志社生活を終えた八郎は、母の姉とその夫(大久保真次郎、久布白落実の父)の牧会するカリフォルニア州、オークランドの教会を当面の落ち着き先として一九〇八年八月、横浜より「少年移民として単身渡米」した。しかし同じ船(丹後丸)では少年の父と原田助(第七代社長)の知遇を得ていた奥江清之助が同州・リヴィングストンで後の「神の恵農場」を開拓するため乗り合わせている。

アメリカではしばらく大久保のもとで雑役をした後、奥江の農場で三年間、牛馬と共に働いた。しかし、パイオニア農民であった奥江も信仰においては狭く、個人主義は尊重しない純福音の立場。八郎に農民から離れる時が来た。それは彼が大学進学を決行する好機でもあった。

### 三

湯浅八郎の晩年の教会や大学での説教には決まって旧約聖書、「伝道の書」第三章十一節」が引用される。「神のなされることは皆その時にかなって美しい。神はまた人の心に

永遠を思う思いを授けられた。それでもなお、人は神のなされるわざを初めから終りまで見きわめることはできない」とある。

思えば、後半生の湯浅八郎をつくっていく「時」は、一九一二年カンサス州立農科大学(園芸学)に入学し、マンハッタンのキリスト教青年会(YMCA)の会館に寄宿した時に到来した。この頃、会衆派教会に通い、学生YMCA運動を知り、授業よりも、農業試験場のアルバイトに忙しく、ついにそこで託された害虫の研究が彼の昆虫学者としての道を定め、イリノイ大学大学院の四年間で学位(P.H.D. 一九二〇年)を得る。また信仰的にも敬愛する牧師、アウグスティーンの家から偉大な感化を受け、神の支配するこの地上は全て神の家庭であるという父・治郎ゆずりの四海同胞思想が純粹な形で目覚めてくる。彼はこのタイプの信仰と生活方式を堅持していた。イリノイ時代は更に八郎の人生に劃期的であった。それは丁度、一九一九年末から翌年にかけてアイオワ州、デューモンで開催された学生宣教奉仕者の会(S・V・C)に彼はイリノイ大学学生YMCAの代表として参加し、二人の人物と出会った。一人は世界



朝の露店市に立つ湯浅先生

的なキリスト教学生、青年運動の指導者、ジョン・R・モット博士であり、今一人は一九二一年八郎と結婚をする同州・シンプソン大学留學生、鶴飼清子であった。

妻となった清子によっていささか孤独な自由人のアメリカ生活は歯止めをかけられた。しかし、これもまた自然であった。帰国への道が大きく開かれたのである。

一九二四年より当時の京都帝国大学は農学部創設に着手した。札幌、駒場と京都に農科大学を置くことは農業立国の基本方策の一つであった。このことは同期に働いたわたしの岳父（橋本傅左衛門）から聞かされている。

先進国アメリカより新しい学風を持ちこんだ湯浅八郎教授には、歓迎と誤解のつきまとう大学の研究教育現場が待っていた。「日本の

中学しか出ていない者が、当時の帝大教授になったのですから」と述懐していた日本人らしい彼の姿は、また日本人へ復元せんとした当時の彼の回想でもあった。

#### 四

周知の如く、彼は一九三五年（昭和十年）二月、同志社より第十代総長として要請され満三年間その重責を担った。日本の歴史は四年前の満州事変を契機にアジア侵略の神聖化とマルクス主義やキリスト教自由信仰を排除していく昭和ファシズムの論理が様々な力をもって現れて来ていた。とくに右翼勢力のいやがらせ（神棚をまつり、取りはずしの命に反抗させる）や「国体明徴」論文を『同志社論叢』に載せなかった事件で責任を問われたことは、自然科学の純な心には全くなじみぬ政治的、日本流の背景をもつものであった。彼は再び渡米する。一九三九年、インドの世界宣教会議に出席した後、アメリカで今日問われる「地域土着文化と出会うキリスト教宣教」を他民族愛、平和の立場で訴え、第二次大戦中も在米邦人収容キャンプで教会人の救済活動に協力した。帰国して家族と再会したのは七年後であった。

一九四七年、第十二代総長として同志社に復帰して三年、父の共同體志向（キリスト者が率先して学習「便覧舎」や事業を起す）を受け、国際・学際の高学府・國際基督教大学創設にあづかり初代総長となる。しかし京都に帰国以来、東洋の心を無名で貧しき工人の生活用具製作に求めた民芸の求道が、その師、柳宗悦、或いは使徒パウロの宗教真理探求にも似て、一九八一年八月十五日、九十一歳の生涯を終えるまで、キリストをひたすら先に追い求める永遠への思いの旅路をたどらせていった。

（女子大学教授）

〈注〉①同志社大学アメリカ研究所編「あるリベラリストの回想」日本YMCA同盟出版部、一九七七年、八〇頁

②同書九四頁、湯浅八郎「私の民芸道観」くらし手の会、一九八〇年、九頁には「二年」の時とある。

③湯浅、同書一〇頁、その他、和田洋一編「同志社の思想家たち」同大生協出版部、武田清子「人間観の相剋」弘文堂新社、雑誌「開拓者」一九三八年四月号、など参照。